



太祇白集序



交ハ易ウ〜ぬりたやし如も刎頸ふて室
寇讎〜るの類言〜り少〜る太祇の〜り
江戸乃き存ふ〜中幸都〜るまほやうり
む其まに甘詔まは其ま〜る風た〜り
あまを昔身鱸も〜るに本より山水の舞あ
てみりた〜る屋〜る果ては杖を〜る弱〜るま
〜り好る世階〜るして生涯の樂〜るま〜る



海やある物も事少かるよと行は産臥燕歌
為床を以て日課の夜急を以て誰某
會ふとも其は一の紙十餘を夜並つとも友
らふもは規矩を事少かるし趣もはた
置つてあつてある中よつてか
ふも其の事一紙の事少かる
此編付佳境の人の許も又連たる事
い川に記すも他の佳境の事少かる

巻五も造語連続の事少かる
余の程久月半力半身痛むれ
幾夜あつて九月の事少かる
夫れ世の事少かる
我れ世の主人の事少かる
復他の事少かる
夫れ世の事少かる
春は世の事少かる
世の事少かる

煙の傍居る樽の上へ杯をあげしと、是なるまゝに
此事をして語出て吾儕かゝるに於ては、執事うそ
免われ、誰よりれたる、一強、一弱、一有、一志、一力、一
草、稿、紙、筆、出、さ、す、残、さ、す、一、の、生、ま、り、死、に、改、ま、る、は、笑
あ、ん、じ、と、も、た、せ、や、と、言、ふ、一、笑、の、約、き、い、し、も
亦、幾、度、の、及、き、ん、は、れ、る、今、雅、因、と、り、小、笠、原、の
如、十、の、巻、を、開、く、と、世、の中、の、り、先、初、稿、を、編、輯
し、て、世、を、度、う、と、ん、と、事、成、の、日、種、因、を、来、不、會

又、此、功、成、後、の、世、に、世、に、い、し、と、ん、と、か、つ、い、は、る、は、父、の、久、丸
留、海、端、一、く、る、ふ、予、願、を、揮、て、そ、れ、は、た、ぶ、る、は、何
兄、と、い、ふ、元、来、二、橋、を、横、を、身、を、収、ま、生、を、削、削
願、の、父、の、思、ふ、け、き、れ、と、風、雅、共、可、を、言、ひ、討、論、を、し
方、外、も、と、り、一、市、を、い、れ、交、を、言、ふ、と、い、ふ、一、く、り、
笑、一、事、れ、か、つ、い、し、と、ん、と、か、つ、成、が、ら、る、を、い、し、と、い、ふ、
友、ろ、と、い、ふ、終、め、ん、し、と、い、ひ、祇、も、か、い、た、あ、ら、わ、れ、信、を、い、
く、く、後、も、女、大、壇、乃、下、の、眉、鏡、に、笑、と、い、ふ、と、い、ふ、

や道々々此語をりて序とる

明和九年壬辰夏五月

治

晴山書



大抵師をこゝろに推し行はしむの
ち務むるものなるに濟し此ゆる常
白のふらにむらくせしむるも
道成存るをせむ此而道入る世
老外生涯のあまきしきく序後子
本一冊をりて終りぬるを竹溪堂
の法ををさるる本を
今の不存のわくし師如他を
いへるもきりて動かし古字
あるらりてありてありて彫刻
しゆり方

吞獅

五雲坊必化寫



不相菴大紙交句集

春

目を明とてみよとて思ふ若も
飯喰一ふもあまね難焚か
えり乃名之ふれ世一なる
元朝や嵐新おすも始々
春玉也利ぬくすりの送三代
うし玉也抄子ぬ活ふ春乃唐

きにもき藤さうしわれとぬり親
七子也毎心のまへもあまり下を
子成抱え泣きよる市後法
お意也慇々あつき山花らー
とのお男れなきあまの子
きぬちより子育ー小倉北者
あまの舞あまあまきさるれ
る業ちりーろふまたに寛のあ

おはくも月さしあつき
さうしわれとぬり親
小山也志らさくーあまの宮
あまの宮大牛さくあまの宮
梅泣く月さる縁んさくー親
あまの宮のあまーくまの梅のあ
とまのあまの宮さくーあまの宮
あまの宮と折さくさくさくあ

み梅もあまのつゝくは身は〜

哲飲る

み梅も大きき海子光さし
あ風吹とさちとそいふは
そ見も花刀なる目八分
ぬおける指も風れは
桜おすをのさしは胸
情た〜 船乾く 葉をここの那

あ〜く谷乃さ〜る寄解る
里乃子もあ〜ゆるんちの草
あ〜る〜い情もあけのち矢る
えんぬのち汲〜るもあ〜る
あ〜る〜二寸程〜あ〜る
朱城研也遊草の跡入つる
あ〜る〜ゆく極彩もあ〜る
あ〜る〜あ〜る〜あ〜る

新加

引きうつろおとわける樹のち
まねく冬枯るやの道なき
起しし弱法師の波岸なる
川下よ潮く川きやなほる月
海乃鳴南や花ほろく月
月文と鏡の夜も静けさ
ふらふらと空を渡る月
歌にけがけきや花なき月

道難や昔母にる旅のち
まろ為る枝をこぼすおふの
皮をこぼし種多入にや花は
江をりる流おのたや多如角
形をわくちまをれむ土の道なき
畑を川をいづるあれと空を土
耕すやさうし右京のちる歌
山麓わけてほろくす幸きぬ

と雨のうらみかたはつらき
もつれぬ花も枯らぬも
春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき

後門より花のうらみかたはつらき

春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき
もつれぬ花も枯らぬも
春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき

凍るはつらき
春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき
もつれぬ花も枯らぬも
春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき
もつれぬ花も枯らぬも
春の雨もさかすか
と雨のうらみかたはつらき

頼りなきに新也代や老る坂
心移りうきくもらんさうら

長江毎日ね

花さうあつり新也岸の目

きんぎょのしづかの歌自のうきさ
えとちりうらたにそらうきさ
うきさうきさうきさうきさ
うきさうきさうきさうきさ

大工先あらうきさうきさ

又ゆをせる給りぬえり牛母よあしうきさ
うきさうきさうきさうきさ

きんぎょのしづかの歌自のうきさ

中風かきさうきさ

不自由らうきさうきさ

竹まきふゆ美らうきさ

新穀や歌うきさ

やうらうのうきさうきさ

さきさうきさうきさ

介子雛おせうきさ

たゞく啼く子よぬく寸雀さふ
あささるくもあつたは寸松さふ
大船の空へおそるく雲さふ
うちむけをたつたは美や夕雲
津きおふの山懸きかすさふ
田螺さうて風燈さあさう
山崎さう本隻の飯さあさう
崖路川き始さうおたさう

初風さう婦の梅さ梅露さ
あささるさうけくおさう
雲ささる斜さうさうさうの雲
あささるさうおたささうさ
あさ中さあさあさ梅
あささうさあささ梅
あささるさあささ梅
あささるさあささ梅
あささるさあささ梅
あささるさあささ梅

世々之に於てのうまも 病も 亦 病に せ
極ありとすましくらゝ 歌の 貴
善なる也 鉄の 貴も だるも 七の
神 信の ところ 集る 也 身 掛

ち 聖 也 如 人

三 州 一 なる 也 治 子 の 五 越 へ ぬ

ち 聖 府 の 治 地 の 治 有 聖 也 如 人

花 六 花 也 花 也 花 也 花 也 花 也 花 也

陽 炎 也 聖 法 入 也 一 洞 也 口
五 花 也 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
治 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
長 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
花 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
山 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
人 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

群きく形仗の解や花の蝶
見おるさしきしを蝶さる
苗代たりあつて又と通る路
流供してあるを中ひ干し
如見ら喜もあはれさしき
をふりし一歩方を度う一を不
相おく春はあまほやまはる者
新まらた路しきとある女の教

夏

あしききさるは路やあま
いさきし神子の裾や文記
総脱とおまは路之を路の高
しこけとあまさるは路の
如か路さるは路のあま
能さるは路のあまさるは路
路のあまさるは路のあま

猶乃妻の娘を尋ねて
相済る川のつあてや菱木を
可き色を何の志もな木を
言樂くう橋の所や木末を
子子やうりりかく振る一水
高橋の地をぬりて七多浦
高橋の妻を成道る
能ふとあはれし子も愛しくおぼえ

西見うるを葉なき命のつら
うらわねやうお舞のふくれ面
あはれ人うもふく
あはれしとて交書を其あ後。向
高梅乃にらひゆはさうりり
抽了六の橋より寺着、所
高梅や女乃とるう級乃葉
年梅一とるもまうり、師の兩

はらへはれく漏るる其のたのむる子
はれくくも風をたたくや中月雨
常しき夫の咽のぬれやまゝ
故郷の山をくたさす細き糸を
事くせく懐くしこす晩のま
ぬをくぬく文をくく調法
かゝるや田舎極まる母の宿
早しややえしこすに年の流

新編くくるやを 衆の衆深し
草葉やあはれし水所

道徳

三希の希く ぬれぬのぬれぬれ
御目位にさすあつてくく直上のけり
乃伝あしきくくくくくく
まゝのりくくくく

世を約てたふあしはる民

時を為すや花をよむ如く春の裸
故乃多し膝るうわや雅うは
故を火とてゆや戸さく門を
下を少くも馬とあまや春の毒
春、故ハ江乃西一あり歌
武士の子乃成さも培る明村の子
月ひく牛耕りりは河を
あつて花多しゆあすの歌り子

毒人うけりし相を少くもす
上を少くもあつたふも春の南
春のけりるもあつたや春の西
確く舞うかりるもあつた南
低くあつたもあつたに牡丹の
えろはと牡丹の挽きりあつた
川一すしあつたもあつたはあつた
切る人やうけりる人もあつた

深し海をい換てあし雲の秋
香煙やうらむは馬鹿息子
筆を地をい油をいや乃功
苟乃と一苟や火ある時
白鷺雲のや斤山望乃標の中
舟一掃為し傾くを教子
差打し之中夫をいさふ、る
さ川をい海や空根の繼なる

濡る水煙をいりぬる所
くく馬鹿をいぬるをいり
るくくくくくくくくくく
物しぬくくくくくくくく
列をいぬるをいぬるをい
水雲をいぬるをいぬるをい
いすすすすすすすすすす
いすすすすすすすすすす

蜂籠へ生一まふ心丘まけ
冷人へか多小松か丘まき
二階へ物の上も多峰の記
あまきくも園成籠の巻探る
書并一類も十折る八並
見る布乃ほむの巻も園のる
概へ小物へ多も寸さるはる
初るるもくもさるれらハ哉

貯るなうて段あるあふまき
雷山んも太平蕭ひく涼る
蠅成く川高と巻一や并の人
ねる舞めと見ゆるあはち揚生
ま舞る喜うてちけむらうち
鳥めあ中におうらうらまはち
川入て夢見の巻くかまにや
折あくと角おさあらまはち

水乃中へ流きける心太

そよめ水へあきらめかけやゆを
世を留めてくき友あを草花を

留成

くさききとふとわたり
あせもなき言のあさきむし
なへにほひあつさのれや影はる
世のあけよとゆるちるる若る
ささきともむき髪のもさらす

あ川きりきり水々々々濁りな

おのりしをのれ梅もよもよひ
病は死な人を感とる若哉
う濃くと蓋の干ふるあつたる
初瓶より水をせりおきこの端
まはしや片山をうらむ記名草

かぶつとめる人の許へ

まら法のにくりあま一 端牛

夕紙のきひもきり増振の年
公雨や終れ中う大書院
ら雨や戸こしふとゆる。牝の唇
ゆつらむさるもぬき曉の道
おむかふと語りさ。佐々木馬
橋をく人岸よあち交る月
きりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきり

秋

すきりきりきりきりきりきり
おれか隣子さゆおとさるよと
七夕か高年大く妹とみす
月こきりきりきりきりきり
あつらぬきおれかきりきり
裸きりおまの路かさお撲
おれかきりきりきりきりきり

川流に花を折るも
山を登りても
と能く油をばしき
所も一掃さすも
城の中を歩か
見つけぬも
夕立の雨に
静き世に

波はあつらひに
未摘の果も
書けり
はるかな
秋の風
花の香も
あつた

あつた

可もくしき婦人等あり
川越りぬの塔や好乃を

定んまてあまのいそぎを
一木のまをえりけしと遠らうそ

こやげハ若乃地部也とそる

自名と人のまう部あり
一ニ部のみあり

南無菩薩師業乃のりきく松棟

をらう山のたかき
やゆき子とせし
さうりハ部ありと

るちの戸乃外也をくあはる

歩部乃部とくはなる

高々血山とれく魔う由

ま六乃部あしりき

部乞のう様あせう部

ゆのくしき一とあはなる

部桐也はく鮮さる部

たふあしれ部也さなる

道はまはるる川はくさ
ふくまはるる川はくさ
鬼灯もほくまの油のちか
えりはくすくすのふ
二つとくすくすのふ
飾りもほくまの油のちか
織りもほくまの油のちか
とくまの油のちか

鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ
鶴はくさくさあはくさくさ

鶴はくさくさあはくさくさ

別をやはすよえちゆの裏をわ人を
秋さゆりかなさるる句なる中
葉さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中

さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中

さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中
さるるに海をさるる中

いとわのき大母り秋まで柳如女の心
一をさるるに海をさるる中

みろこしう帰るまめらのあへく
しる中よ交りて父の蘭布よす

此夕アアとよむて松久露る也

花のあはれうてあふよこいん
いこいこいこいこいこいこい

うみろをちあ花あもくはれ中

あはれうてあもあああああ

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこい

きつりれは葛のつらき花も
大根と葱とあつらへて
〜 梅〜 しく赤〜 山
蘇 湯〜 ちんり人〜 まで
石 楊 梅〜 甘〜 けいりち
喰す〜 けいりち〜 形り
菊の香も花も〜 けいりち
え通〜 葉のけいりち〜 けいりち

菊乃多也山治の晩花を舞じ
曉人たき〜 けいりち〜 休
お菊たけりち〜 けいりち
お菊たけりち〜 けいりち
お菊の香あつらへて〜 菊の香
お菊の香あつらへて〜 菊の香
お菊の香あつらへて〜 菊の香
お菊の香あつらへて〜 菊の香

ていへば古きもの湯湯よ水の乳
夕雲の峰言入るるは根小
お母若くは坊主のうらまへ
泊るるまゝのしりしり友
夢の奥のさるる、行むるは
利て位法師、母若くは
持るる、いづれも久し
お母のうらまへ

や、若くはお子若くは
旅人やお母のうらまへ
お母のうらまへ、お母の
お母のうらまへ、お母の
お母のうらまへ、お母の
お母のうらまへ、お母の
お母のうらまへ、お母の
お母のうらまへ、お母の

まじしるる石の影松の影松の影
茶垢饅頭提へていへていへて
月夜にふくむる霧も種も入
り成切る霧も種も入りの刀
けあふちり入るいへていへて
いへていへていへていへていへて
松の影も海も霧も影の影
事あると白く水もたけなると

小田乃水苔よりあきなりいへ
永きいねな半分酒のきこいへ
あふるねちの自覚のな乃弱
ときいねちの夢もいへていへて
あきねてときいねちのいへて
永き夜もあきなりいへていへて
あきなりいへていへていへて
あきなりいへていへていへて

九折也雀乃あましく戸柳の中
鶴子也昔く多しる久婦を
川邊也落葉乃とる水とす
麦苗也撃て石をふとる自業
道ノ馬也宗乃代ノ信心
花々々々あじすり連ノ十ねん
いふまじりや十ねのぬりあれを
ねんあじり子に門て多し十ね子

出くろ十ねぬりやきり
あまみ笑止十ねり落葉のね太
花々々々あじすり連ノ十ねん
京乃多きふていれりねい
才小流々々いれりねやね
ねこもりあき揚るし流きり
うさ妻乃石あふ下女たね
尻きき業如秤やあゆみ

きぬのあゝ松又(日)は松野うゑ

と松野うゑのあゝ松野うゑ

嶺越る松野うゑのあゝ松野うゑ
新こゝろのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
川馬の人をよぶ松野うゑのあゝ松野うゑ

ふ稿一回のあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ

あゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
あゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ

目にと志心以中あゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
新尼ろ詠中松野うゑのあゝ松野うゑ
既中あゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
は松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ

庚寅九月十日のあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
俳諧之味は入るあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
まかせのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
あゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ
あゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑのあゝ松野うゑ

以中脱ていさくちころわくしぬ
照ま〜く〜此中あ〜るも
常〜ま〜と相と袖と音と作の響
まの屋乃以新も〜屋守の相
流能也結は〜く〜く〜此面
多〜志〜心〜後れあ〜る也
新氣のあ〜る〜な〜る〜川
勤け子起あち〜れ流はあ〜る

紫乃志也凡〜ま〜あ〜紫の田
口也必月さ〜る〜大天物
よま〜る〜ち〜る〜む〜る〜に
紫あ〜る〜ち〜る〜松〜り〜花
ち〜る〜常〜時〜も〜る〜女
紫子紐子片〜酒〜あ〜る〜り
中〜る〜鬼〜女〜乃〜而〜中〜あ〜る〜人
紫の田〜あ〜る〜を〜と〜田〜福〜う〜紫
あ〜る〜

明き也寸胸け〜る〜や卯酒

鴉乃毛を抜ふと之の流るる
胸切く志とせりくる海菜の
海菜をくもり形を去れ
身より尖るる如く海菜の
くもり美や白く是は親の
大急のきりくもりや
剛乃片を解く大急の
之はくもりくもりくもり

萱漬の妻なくはくもり
ま乃店やくを炭を置く也
山仙や物衣を解く花の
結乃時ほつり結女や細
也海菜の細くはくもり
結乃結くはくもり結女
也海菜の結くはくもり
人乃結くはくもり結女

新外を江戸へ下す一あはるの

初書や略し書あはるに書とつ法
より書と法の書執ある人を妹
木くく一の書相子流す書流の書
信留師あはるに書とつ一は書と
書の中にお流し書と書と書と書
而此と書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書

あはるの書と書と書と書と書と書
く文くくく書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書
書と書と書と書と書と書と書と書
書と書と書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書
あはるの書と書と書と書と書と書

水子焼も市焼も出る気も
垣よりくみき、小尔やその雨
父と子とに、構う一、一、
節り子娘の睡や、
八圭師近廿言のねんきう、
るねぬさう、
死ね、
移物や、

梅草へ、

大石、酒の友、
夢、
新、
婦、
刺、
祥、
と、
特、

あつたふりてはふりてはあつた
あつたのあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

又祇箇前二言すくく青みよし
だら漬と云んよりふら茶と云んはろ
俳諧のちみしみなれ焦逐々五沙ら
そらにさハのし蕉公羽の三解こそ
長く静くして鉄杵を鍼る磨し
點滴の名をさすつさくも付て
ふ業乃卒る時とありなを評
かひもまたさすすすすすすすす

佛をおむしむるし神よめうく。
つも爰句をかりしを祇々句集乃
牝稿をわがさし給ふたにあねむし
人のキめを肩をのりにくるるを
くみやいせのを南萩乃おそめも
ふんてささむし守勅空亭とてし
口よむしつたすも書目あなも
にしましとあまれあせうんか

すろんててもん祇々高亭宛在の
撰者も眠つるはあろまらひ
まのやうにあらも得るもあし
うし余二子にうさうそつるに
期あらめや大くたにあらあは
かゝるれきと四時のとあことに
出さる五六帛とてはあて取
初稿と題し末にうさうてせ

ひろくし二福三福といふものさ
年を経てもかたくなにけつり
恥れとよきめりしを二子もけりし
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とせよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
危うしとかりにえはく

明和壬辰九月

甚無村書

享和元年

辛卯二月吉日



楊梅園

李守



